慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巻頭言
Sub Title	
Author	大川, 恵子(Ōkawa, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.9/10, No.1 (2023. 3) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	合併号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000009-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

巻頭言

大川 恵子
慶應義塾大学 DMC 研究センター所長
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授

『慶應義塾大学 DMC 紀要』第 9 号・10 号合併号をお届けします。本号は、2021 年、2022 年の 2 年間の DMC 所員による研究活動及び研究成果をまとめたもので、2020 年より開始した DMC 所員による対談 DMC TALK シリーズ 4 編の寄稿、2022 年 3 月に開催した DMC ミニシンポジウム"Fireside Chat"の記録、2022 年 11 月に開催した DMC シンポジウムの記録、また、投稿論文 1 編を掲載しています。

例年行なっていたシンポジウムという形以外での社会への発信チャンネルとして、2020 年より開設した DMC 所員による対談 「DMC TALK[1]」ですが、本合併号でも引き続き DMC 副所長の金子晋丈准教授（理工学部）が聞き役を務め、vol.02～vol.05 の 4 本を掲載しています。vol.02 では考古学と博物館学を専門とされる安藤広道教授（文学部）が考古学から見たデジタル技術やデジタルアーカイブの可能性について語ります。vol.03 では、デジタル技術、ネットワークなど IT 分野を広く専門とする視野から重野寛教授（理工学部）がデジタルアーカイブの本質について語ります。vol.04 では、慶應義塾大学における文化財のデジタル化を長い間牽引され、現在慶應ミュージアムコモンズ [2]の初代機構長も務める松田隆美教授（文学部）をお迎えし、書物におけるデジタルとアナログの歴史とこれからについて語ります。vol.05 はヒューマンコンピュータインタラクション（HCI）の分野で活躍している若手研究者である杉浦裕太准教授（理工学部）が、HCI がデザインする新しい世界観について語ります。

DMC ではシンポジウムを毎年開催して DMC の研究成果の発表と議論を行なってきましたが、2020 年度はコロナ禍によって開催を見合わせました。本稿では、2021 年度オンライン開催、2022 年度ハイブリッド開催の 2 回のシンポジウムの様子を掲載しています。

慶應義塾大学はオープンオンラインコースプラットフォームである FutureLearn[3]上でオンラインコースを開講していますが、DMC は 2014 年よりコース開発のコアチームとして、各組織と連携しながらコース開発と運営を担っています [4]。2021 年度は、2019 シンポジウム「大学教育のミライ」の第 2 弾として「大学教育のミライその 2：Hybrid & Flexible」と題して、再びオンライン教育をテーマにした、カジュアルでオープンな "Fireside Chat"を完全オンラインで開催しました。FutureLearn のゲストスピーカーによる解説に加え、実際にコースを開講している

1 https://www.dmc.keio.ac.jp/dmc_talk.html
2 https://kemco.keio.ac.jp/
3 https://www.futurelearn.com/
4 https://www.fl-keio.info/intro/

3 名の教員をお招きし、オンラインコースへの期待、課題、戦略、課題など、経験を通して見えてきたことを 3 つのカジュアルトークセッションの形式で議論しました。

2022 年度は、シンポジウム「デジタルの本質とはなにか――メタバースに向かう中で考える」を、対面とオンラインによるハイブリッド形式で 2022 年 11 月、慶應日吉キャンパスにて開催しました。ここでは、4 名のパネルディスカッションという形で、異なる分野の DMC 所員による様々な研究分野から見た「デジタル」に対する発表を題材として、未来の向かう方向について学際的な議論が繰り広げられました。3 年ぶり現地開催となり、デモ展示も復活するなど、現地における参加者との対話を楽しむことのできるシンポジウムの価値を再確認しました。

本合併号では、1 編の寄稿も掲載されています。徳永聡子教授（文学部）の投稿論文「西洋貴重書オンラインカタログ作成のための基礎調査」では、文学部の専門教育の試みとして授業の一環として実施された基礎調査の成果として、教員の監修のもとで学生によって作成された、義塾が所有する西洋貴重書の蔵書目録を掲載しています。発表までに 5 年をかけたこの成果は、様々な図書館で貴重書オンラインカタログの公開が急速に進む中で、義塾の豊富な西洋貴重書のオンラインカタログ作成に大いに貢献する大変貴重な資料であり、これを本紀要に掲載できたことは大きな喜びです。

2021～2022 年は、2020 年初頭に突然始まったコロナ禍による大混乱がひと段落つき、日々の研究・教育・業務も、制限を容認しつつ本質を追求して方法論を確立するという、いわゆる「With コロナ」の社会を構築してきた 2 年間でした。その過程で、デジタル技術は大きな役割を果たし、サイバー空間での社会活動は人々の生活に急速に浸透してきました。これは、コロナ前の予測からは 10 年前倒したデジタル社会の到来と言われています。その中で私たちは、手に触れることのできるオブジェクトと、グローバルにサイバー空間を駆け巡るデジタルデータとの融合を体験してきたのではないでしょうか。DMC は、技術、科学、社会、芸術、文化など幅広い分野の研究者が「デジタルコンテンツ」を軸に集まり、互いの研究領域の枠を超えてコラボレーションしていくことで新しいデジタル社会を模索することを目指して作られた領域横断型の研究組織です。この急速なデジタル社会への移行は、その速度こそコロナ禍によって加速されましたが、まさに DMC がその前進である DM C 統合研究機構を開始した 2004 年から継続して挑戦してきていたことの延長線上にあったものであり、これからさらに高度化し加速する変化に対して、DMC はこれからも重要な役割を果たしていく責任があると考えています。

『DMC 紀要』第 9 号・10 号合併号を通じ、より多くの研究者、関係者の皆様へ当センターの活動をお伝えできましたら幸いです。